

# 子どもへの関心が強い地域の 特性に関する一考察

佐野 茂

- I 課題・問題の所在
- II 方法
  - 1 地域の選定
  - 2 面談者の選定および質問内容
- III 結果
- IV 考察と今後の課題

## I 課題・問題の所在

本研究課題は地域の教育力を活性化させる要因について、現在も地域内交流が活発と推定される地域の現地調査から、そこでの諸条件について分析・考察をこころみるものである。

戦後、地域の教育力はいちじるしく衰退し、いい意味での異年齢集団や、近隣年長者からの人間形成に関する感化や薫陶を受けることは極めて稀なものになってしまった。これらの状況を改善するために近年、生涯学習局を中心に、制度的側面、また地域社会学や教育社会学等の様々な視点からその方途が議論されている<sup>1)</sup>。数は少ないものの子どもの居場所の確保を柱にした子どもセンターの設置など有益な施策も始められている<sup>2)</sup>。新しい教育基本法にみる社会教育の位置づけからも、今後、家庭と地域を結ぶ新しい制度的な施策はますます活発になることは予測できる。このように行政主導の制度的な側面からの子ども支援は時宜を得たものであるが、これらに加え従来から地域に残ってきた地域独自の自然な営みでの地域の教育力を掘り起こすことも重要な方途と考える。

このような課題を考えるヒントとして、例えば今日でも居住地域への愛着が強く近隣地域の子どもに対する関心が強い地域を抽出し、そこでの地域特性の分析を計るならば、地域の教育力を再興する諸要因を考察できるのではないだろうか。

筆者は戦前の家庭の教育力と地域との関わり・交流を年長者からの面接調査により長年検証してきた<sup>3)</sup>。当時の家庭教育が機能していたのは地域との連携・関わりが極めて強く、

---

1) 例えば中央教育審議会答申『21世紀を展望する我が国の教育の在り方について』平成8年度等。  
2) 全国子ども会連合会が主催する「放課後子どもプラン」等、子どもの居場所作りについて様々な社会教育の視点から活動が試みられている。  
3) 拙稿、「家庭教育の変容に関する一考察」大阪商業大学論集142号、平成18年等参照のこと。

そこには地域と家庭を結ぶ共同体特有の「装置」が自然な形式で用意されていたということであった。その多くは地域に残る昔からの年中行事や地域独自の祭礼・行事で、それらを通じて地域と家庭が無理なく連携、繋がりを有していた。したがって今日でも地域への愛着が強く、隣人の子どもへの関心が強い地域では何らかの共同体特有の「装置」が残存しているか、「新しい工夫」が施されていると仮説できるのではないだろうか。図1は本調査予定地でみられた地域の子どもの関心を示す掲示板であるが、このような活動も子どもへの関心を示す工夫の一方法であろう。いずれにせよ、今日でも地域・隣人の子どもに対する関心が強い地域の「装置」や「新しい工夫」を中心とした地域特性を考証することは、これから地域の教育力を再興しようとする場合の有益なヒントとなると考える。



図1 「掲示」による  
関心

以上のような視点から小論では、JGSS2003年調査を参照にして<sup>4)</sup>、地域の子ども達への関心が強い地域を選定し、そこでの現地調査からどのような諸要因が地域の教育力を活性化しているかを考察したい。

## II 方法

上述したような仮説から本研究ではJGSS2003年データから、今日でも地域住民の子どもへの関心が強い地域を抽出し、そこでの現地調査からどのような「装置」や「新しい工夫」が地域の子どもに目を向ける諸要因になっているかを考察する。具体的方法は以下のとおりである。

### 1 地域の選定

JGSS2003年調査において「あなたがお住まいの地域で、顔見知りの子ども（小学校5・6年生）が万引きをしているのを見かけたとします。あなたはどのような行動をとりますか。あてはまるものすべてに○をつけてください」という質問項目がある。回答の選択肢としては「本人に注意する」「家族に知らせる」「店の人に知らせる」「学校に知らせる」「何もしない」「その他」があげられ、この設問は地域住民の地域の子ども達への関心の強さの指標として設定したものである。JGSS調査では全国に341の調査地点を設け、各地点13名から15名の回答者を抽出し（大多数は15名）、面談及び留め置き調査を実施している。上記の調査は留め置きタイプのもので、全対象者の半数の人に実施された。したがって各地点（地域）に7名もしくは8名がこの項目の回答者になっている。

表1は今回の報告対象である九州地区の各地域別回答パターンである。『関わりあり』とは「本人に注意」、「家族に知らせる」、「店の人に知らせる」、「学校に知らせる」といった何

4) 拙稿「地域への愛着と子どもへの関わりに関する一考察」日本版JGSS研究論文集〔4〕大阪商業大学比較地域研究所、2005年、を参照のこと。

表1 九州地区別関わり度数

鹿児島 都市名	鹿児島市内 B地区	鹿児島市内 A地区	川内市 C地区	国分町 D地区	山川町 E地区	薩摩郡 F地区
関わり有り	2	6	3	5	6	5
関わり無し	0	0	0	0	0	0

熊本 都市名	熊本市内 A地区	熊本市内 B地区	八代市内 C地区	下益城郡 D地区	菊池郡 E地区	上益城郡 F地区
関わり有り	4	5	3	5	2	3
関わり無し	0	0	0	0	0	0

宮崎 都市名	宮崎市内 A地区	都城市 B地区	小林市 C地区	高岡町 D地区
関わり有り	3	6	4	6
関わり無し	1	0	1	0

大分 都市名	大分市内 A地区	大分市内 B地区	別府市内 C地区	臼杵市内 D地区	速水郡日出 E地区	日田郡天瀬 F地区
関わり有り	1	6	2	4	4	6
関わり無し	1	0	2	1	1	0

佐賀 都市名	伊万里市内 B地区	佐・三養其郡 C地区	佐・杵島郡 D地区	佐賀市内 A地区
関わり有り	5	5	4	3
関わり無し	0	1	0	3

長崎 都市名	長崎市内 A地区	佐世保市内 C地区	大村市内 D地区	西彼杵郡 E地区	長崎市内 B地区
関わり有り	5	4	7	5	3
関わり無し	1	2	0	1	1

福岡 都市名	福岡市博多区 B地区	福岡市中央区 C地区	福岡市南区 D地区	福岡市城南区 E地区	久留米市 F地区	直方市 G地区
関わり有り	2	5	1	5	5	5
関わり無し	0	1	2	0	0	0

福岡 都市名	甘木市 H地区	春日市 I地区	太宰府市 J地区	福岡市東区 A地区	志面町 K地区	朝倉町 L地区
関わり有り	5	1	1	3	2	4
関わり無し	0	0	0	1	1	1

福岡 都市名	八女郡立花町 M地区	北九州市門司区 N地区	北九州市小倉北 O地区	北九州市小倉南 P地区	北九州市八幡西 Q地区	豊前市 R地区
関わり有り	6	5	1	7	4	5
関わり無し	0	1	0	0	0	0

福岡 都市名	遠賀郡岡垣町 S地区	京都郡苅田町 T地区
関わり有り	6	4
関わり無し	0	1

らかのかたちで、子どもに関わりを持とうと回答した人で、『関わりなし』は「何もしない」と回答した人である。ちなみに全国調査において、5名以上の回答者があった各地点の「関わり有り、無し」の比率は約46%の地点で全員が関わり有りというものであった。したがって54%の地域は、その地域の中で「何もしない」と回答した人が含まれていた地域である<sup>5)</sup>。

本来であれば、全国全ての地点を対象として、『関わりあり』のポイントの高い地域と低い地域を抽出して比較検討しなければならないが、今回はパイロット的調査という位置づけで九州地区に絞り(沖縄県は除く)、その中から『関わりあり』群で高得点の地域を選定し(5人以上が関わり有りとなし回答者が0人)、現地調査を実施した。今回の報告は、鹿児島市内A地区、熊本県B地区、大分県F地区と全国調査の予備調査として、面談が実施できた広島県尾道市のX地区、計4地域の地域特性を報告する。ただ、表1からも理解できるが、上記4地域以外にも九州地区でも高得点地域はあり、そこでの報告があつてしかるべきなのだが諸般の事情で調査実施ができなかったことも付記しておく<sup>6)</sup>。

調査期間は平成18年6月から平成19年3月まで、各地域予備調査含み各3～4回ずつの訪問。

## 2 面談者の選定および質問内容

選定地域の史的背景等に熟知していると考えられる情報提供者を、該当地域の老人会会長または公民館責任者、自治会関係者から紹介してもらう。一般的には、自治会関係者、公民館、子ども会関係者が主たる提供者となった。

質問内容は①調査地区の地勢的特徴・変化(密集地なのか非密集地か、戦前からの集落なのか戦後開発された集落なのか、都市部の住宅地、商業地、混在地域なのか農山村地域なのか等)、②地域の産業構造(就労・勤務形態)、③小学校、中学校の状況、④年中行事や地域行事の有無・参加状況(成人、子ども)、⑤地域へのコミットメントを高めるような特別なイベント、文化資本、自然景勝等の有無、⑥子ども会の状況、地域の大人世代と子どもの交流⑦各家庭の生活状況、⑧地域住民の地域へのコミットメント全般について、⑨その他の地域エピソードで、これらについて、半構造面接法によって記録した。面談時間は2～3時間。原則1対1の面談であるが適宜、筆者と複数の情報提供者の面談の場合もあった。

## Ⅲ 結果

(1) 鹿児島県鹿児島市内B地区(調査期日:2006年6月～7月、予備調査1回、本調査2回)

### ① 情報提供者

A地区元教育関係者、公民館責任者

5) 5人以上回答地域で、全員が関わりありと答えた地域は181地域中85地域で、96地域はその内一人でも「関わり無し」と回答した。

6) 調査実施ができなかった理由として①調査依頼の最初の時点で調査協力が難しいと判断、②現地で回答できるキーパーソンが不在、③面談は始めたものの十分な聞きとりができなかった、等である。

② 地勢的状况、地域住民の生活・就業形態等

鹿児島市より、路線バスで25～30分ぐらいの距離（鹿児島市内中心部より直線距離で約5キロ）にあり、対象地区周辺はここ20～30年で鹿児島市のベッドタウンとして発展してきた山合い地域で、4つの大型の新興団地が県道沿いに開発されている。

今回調査対象のA地区のみが戦前からの町並み、田園風景が残っており、小規模建売り住宅やマンション等の集合住宅も皆無といってよい。隣家との居宅間隔は狭く、間隔があっても一反（段）程度である。地域外からの移住者もほとんどいないとのこと。ただ、A地区から2～3分で県道（幹線バス道）に出るが、その県道沿いにはコンビニや中規模のファミリーレストランが散在する。就業形態は、昔は専業農家中心だったが、現在はほとんどが兼業に変わり、鹿児島市内を就労先とする勤め人が大半を占めているとのこと（通勤時間は30分ぐらい）。

③ 近隣住民間のコミュニケーション（エピソードの抜粋）

- \* A地区47戸（調査時点）の交流はまだ残っており、地域行事への参加率も高く凝集性もある。
- \* 昔からの地域共同体の意識が高齢者にあり、何とかその孫の世代まで残そうとする意識が高い。
- \* 高齢者と若者世代（40歳以下）との交流も残っており、孫の世代までは何とか地域の間人関係を把握できるとのこと。ただ、今後十年で60歳代に世代交代すると、どこまで世代間交流や、地域の凝集性が維持できるかは分からない。
- \* 小規模ながら農産加工所もあり、ここでの活動が地域住民を繋ぐ場にもなっている。
- \* 大きなイベントとして地区内の運動会があり、公民館主催と地域主催の二つがあり、これらへの参加により近隣住民のコミュニケーションがはかれているとのこと。皆さんが日程を調整しあって熱心に参加してくれ断る人はいない。

④ 地域の子どもと大人世代とのコミュニケーション

- \* 町内独自の運動会への参加や、正月二日に行うA地域周辺の伝統行事「鬼火だき」<sup>7)</sup>を通じて交流を深めている。
- \* 校区全体のゴミ拾い活動も熱心にされている。
- \* 子どもからの地域住民への挨拶も自然になされている。
- \* 小学校は各学年平均2クラス程度で中学生の顕著な問題行動の話も無く（10年以上前に少し荒れたこともあったとのことだが）、放課後のいわゆる「鍵っ子」対策としての児童クラブも充実しているとのこと。

7) 鹿児島県の南薩摩地方に残る一年の無病息災を願う正月行事。正月7日に行われる地域が多い。竹の櫓を組み、様々な正月飾りなどを焚き、残り火でぜんざいを作ったり餅などを焼く。A地区でも、前日から子ども達が竹などを用意して、地域の人達と協同して行事に参加するとのこと。

⑤ 課題・その他のエピソード

- \* 何とかここまで世代間のコミュニケーションがはかれてきたが、この先は不透明。
- \* 年中行事（鬼火たき）などを通じて何とか世代間の交流が維持されることを望む。
- \* マンション等の集合住宅が建設されていないこと（外部からの転居者が少ないという意味）が、地域の凝集性を何とか保っている。

(2) 大分県日田市F地区

（調査期日：2006年7月、12月、2007年2月、予備調査2回、本調査2回）

- ① 情報提供者（当該地域選出元村会議員 公民館館長代行 その他有識者2名）
- ② 地勢的状况、地域住民の生活・就業形態等

地方都市の周辺に位置し、山間部の農村地域。最寄りのJR駅まで車で約15分。JR駅周辺は有名な温泉歓楽宿泊地域でもあるが、当該地域はその郊外にあり、その影響はない。住宅間隔は10戸ぐらいが密集し次の密集地まで田畑をはさんで徒歩で約5分ぐらいかかる。昔は専業農家が多かったが、現在は兼業農家が多い。小学校区（大字）で約200戸。自治会組織的には約30戸単位（小字）で活動している。多くは長男がこの土地に残り家を継いでいる。

最近では地域内に別荘地ができ外部（福岡市・北九州市）からの定住者もでてきた。コンビニはまだ無い（国道まで車で25分はかかる）が、広域農道ができたため、近い将来建設される可能性もある。

- ③ 近隣住民間のコミュニケーション

- \* 地域活性のためのものであれば、公民館使用料金は徴収しない。ましてや子ども会使用するときは当然無料。その意味で公民会活動や子ども会活動に理解のある地域。
- \* 冠婚葬祭の付き合いは深く、今日でも相互扶助の関係が維持されている。
- \* 婚姻の時は、別れ（ワカレ：他地域に出て行く）、や見知りあい（ミシリアイ：嫁入り）と呼ばれ、挨拶、宴席がもたれるとのこと。初盆も近隣の人を集める。
- \* 年間の地域行事は、正月2日は公民館に集まり、正月・新年を互いに祝う。冷酒2、3合飲む（ここでは深酒はしない）。4月1日、「花見」と称し公民館でどんちゃん騒ぎ（深酒する）。8月13・14日はお盆。そして隣人の初盆の家に参りに行く。9月1日『豊作祝い』と称し風除け、台風の被害がないよう祈る（どんちゃん騒ぎ）。10月20、21日は宮さんでお祭り。

- ④ 地域の子どもと大人世代とのコミュニケーション

- \* 「小字」単位の地区内はいうに及ばず、両隣の「小字」地区の子ども達も皆顔見知り。
- \* マスコミ等で騒がれる今日の教育問題とは幸いに縁遠い地域。
- \* コンビニもなく、不便なところもあるがそれがかえって子どもの教育には良いところもある。

⑤ 課題・その他のエピソード

- \*外部からの移住された人とのコミュニケーションをどうはかるか。今のところは何とかコミュニケーションはとれている。ただ、自治会には入らない人もいる。
- \*地域を盛り立ててくれる30~40才の後継者作りの難しさ。若い方と根本的に生活形態が違うので、なかなか時間の接点がない。
- \*子どもとの関係は地域行事等を通じてはかかれている。
- \*小学校は各クラス10人前後の小規模。小学生に関しては、世間でいわれるような教育問題は皆無といえるとのこと。ただし、中学校では不登校生徒が最近でてきたとのこと。

(3) 広島県尾道市X地区（調査期日：2006年12月~2007年1月、予備調査1回、本調査2回）

- ① 情報提供者 同地区自治会長
- ② 地勢的状况、地域住民の生活・就業形態等

新幹線駅から徒歩10分ぐらいに位置するが、新幹線駅が市内中心部から少し離れているため、駅周辺は整備されているものの、人の往来はまばらで閑散としたところもある。駅周辺は小規模な新興住宅地があるが（尾道市最初の新興団地）、幹線道路から少し離れると、田畑が多く残っている。調査対象地域は戦前からの居住者（60~70戸）とその分家及び外部からの移住者との混在地域で現在140戸ぐらいになっている。居宅間隔がほぼ密集している地域と、隣家まで一反（段）ぐらい田畑をはさんで居住している地域にわかれる。旧地域の中央に旧市街地から新幹線駅そして、北部地域へ抜ける幹線道路が現在あり道路沿いには小規模ながら飲食店・コンビニ・生活関連商店等がある。まさしく新旧混在地域である。80歳代以上の高齢者はい（藺）草の生産だけでこの地域で生計を立てていた世代であるが、70歳代以下の大半は農業もするが9割以上が勤めに出ているとのこと。

③ 近隣住民同士のコミュニケーション

- \*年間の自治会活動として、一月「トンド焼き」、三月「餅つき・トン汁パーティー」、八月は盆踊り、A神社への奉納行事、十二月は注連縄作りの行事がある。
- \*昔は共有林を所有しており、焚き木等を伐採するなかでコミュニケーションがはかられていた。現在は所有していない。
- \*去年までは葬儀の際はわざわざ各戸から不祝儀を集めていたが、さすがに今年度から自治会から一括のものになった。

④ 地域の子どもの大人世代とのコミュニケーション

- \*上述した「トンド焼き」や「餅つき」、そして「神社への奉納行事」等への参加を通じて地域の大人世代との交わりができています。
- \*普段も地域の人達への挨拶等はきちんとしています。むしろ大人（30代~40代）の方ができていない。

- \* 現在、地区での子ども会の会員数は22、3人で参加率・出席率がいい。
- \* 子どもが生まれれば、町内会でのお祝いをわざわざであるが持っていつている。集団下校等への協力は民生委員や老人会がやっている。(この地域には関係ないように思えるが、時代が時代だけにとのこと)

⑤ 課題・その他のエピソード

- \* 僕らの世代(70歳代)がダウンすれば大昔から伝わってきたことが全て無になる。何といっても、我々の代は、体で覚えていたので。何とか次世代に伝えたいのだが。
- \* とにかく勤め人が多くなったため、朝9時から夜6時までは地域にいないわけだから、地域のことがよくわからなくなったし、お互いに疎遠になる。
- \* 三世代がいかにスムーズにまともな場をつくれるかが今後の課題。子どもの顔は分かっても親の顔が分からないのが現状。小、中学校も特段荒れているということはない。

(4) 熊本市内B地区(調査期日:2006年6月から2007年7月、予備調査1回、本調査2回)

- ① 情報提供者 同地区公民館責任者
- ② 地勢的状况、地域住民の就業・生活形態等

熊本市内の西端に位置するが、市内中心部より路線バスで35分余りの海岸沿い地域で、調査地域は海岸部から少し入った山あいの集落(91年に熊本市に編入)。果物の生産地としても全国に知られるが、その分田畑の耕地面積が少ない。集落にはコンビニや娯楽施設はないが、国道が地域内を横切っているため、車さえあれば生活関連施設には不自由のない地域。しかし国道を少し入っていけば昔ながらの落ち着いた集落が形成されている。居宅間隔は平地が少ないため狭く極めて密集している。開発して団地・宅地にするだけの土地(平地)はない。その点から将来も地域が変わる(外部からの人口移入も含め)可能性は低いと考えられる。少子高齢化による人口の自然減少が続いている。

居住者の約6割が果物農家で、約3割が海産養殖従事者、1~2割が熊本市内(中心地)への勤め人とのこと。

③ 近隣住民間のコミュニケーション

- \* 地区住民の多くはお互いに顔見知りで、地域内の人かそうでないかはほぼ分かる関係が維持されている。
- \* 地域・公民館行事として、5月に町内グランドゴルフ大会(各戸総出、約72戸150人、終了後懇親会)、6月一斉清掃、8月校区盆踊り大会、10月神社秋祭り、2月神社参り(終了後老若男女懇親会)、3、4月自治会決算・予算・総会。
- \* 72戸をさらに隣組として7地区に分け班長を中心に近隣同士のコミュニケーションをはかっている。隣組で冠婚葬祭があれば必ず祝い・不祝儀、お悔やみに顔を出す。
- \* 老人会はますます活発になっている。年2回、グランドゴルフ大会と二月の神社祭りは地域の人が総出で参加し終了後は宴を設け世代間の交流を深める。



④ 地域の子どもと大人世代とのコミュニケーション

- \* 初子長男の家は100%、鯉幟を揚げ（4月1日にたてる）隣近所の人はお祝いする。桃の節句も同じ。
- \* 子ども会も熱心で、正月前の餅つきや、キャンプ、スポーツ大会、廃品回収等の活動をしている。ただ、子ども数の減少で少し低調にも思える（仕方ないこと）。
- \* 地域住民の協力、関心も強い。8～9割の子どもが地域の人に挨拶してくれる。

⑤ 課題・その他のエピソード

- \* 若い方から、近年、あまりにも地域行事への参加が多いとのことでもう少し自由な時間が欲しいとの声も出ている（しかし参加すればそれなりに楽しいという感想もある）。
- \* 10年ぐらい前に中学校が少し落ちつかないことがあったが（家庭に問題のある子がいて地域も掌握していた）、それ以降はない。

#### IV 考察と今後の課題

以上、4地域の「地勢的状况」「近隣住民間のコミュニケーション」「地域の子どもと大人世代のコミュニケーション」から共通するエピソード・特徴をまとめ今後の課題を考察する。

(1) 地勢的状况・地域住民の生活・就業形態

- ① 4地域とも戦前からの村落共同体的なかかわりが残る、かつて農業を主としていた地域が調査対象であった。
- ② 4地域とも他地域からの移住者が極めて少なく、三世帯・四世帯の世帯が多い。（必ずしも同居ではないが近所に居宅がある。）
- ③ 就労形態としては地域のキーパーソンは仕事を引退されているが、現役世代の大半は地域での自営や専業農業従事者ではなく地域外に就労の場をもつ世帯であった。
- ④ 周辺環境としては大分県F地区を除き、主要幹線道路が近くを走っており商業・飲食施設やコンビニ等も存在し、車が使用できれば容易に都市部と同じような利便性は享受できる。

(2) 近隣住民間のコミュニケーション

- ① 地域の年中行事を中心に公民館、自治会関係者の熱心な主導のもと住民同士のコミュニケーションがはかられていた。この場合、昔ながらの自然な近所付き合いの結び付きもあるし、地域リーダーの意図的な働きや、昔からの地域に根ざした年中行事を媒介に

しての結びつきもある。

- ② 地縁に根ざした自然な結びつきは高齢者世代は強個であるが、次世代（30～50代）になると希薄になっている。
  - ③ 地域で就労する現役子育て・就労世代がどの地域も少なくなり、朝、夜、休日しか地域に根ざした生活ができていない状況もある。
- (3) 地域の子どもと大人世代とのコミュニケーション
- ① 各地域とも地域リーダーと現役子育て世代の関係が密なため、その結果地域全体と子どもとの関係がとれている。
  - ② 地域行事への子どもの参加も親を通じての子どもへの誘いになるので、参加率も高く無理のない印象を受ける（ただ、広島県のX地区は他の3地域に比べて、都市化<sup>8)</sup>の影響を最も強く受けており、その意味で自治会の世話役世代と、子育て世代の親との関係が希薄になり、子ども参加の地域行事も難しい状況にきている）。

### (3) 考察および今後の研究課題

本報告課題は子ども達との関わりが強いと推定できる地域から、そこでの地域特性の抽出をこころみたものである。

以上の共通のエピソードを総括すると、地勢的特徴等については、戦前からの農村部の居住地で隣家との間隔も何反（段）も離れるというものではなかった。また、4地域とも外部からの居住者が極めて少ないということも共通していた。ただ就労形態は壮年・若年層世代の現役就労者は大多数が地域外での就労で、平日・昼間の地域での生活はむづかしい状況にあった。この点は4地域も現代日本の平均的な就労形態と変わらない。

このような環境の下、昔からの地域住民間の自然な地縁関係を軸とした、三世代の縦の密な関係が子どもへの関心を生む最も強い要因になっているという印象をうけた。つまり「装置」としては「伝統的な昔ながらの地縁関係」ということになり、決して目新しいものではなかった。ただ、それを補完、強化するものとして、強いリーダーシップを発揮する地域リーダーの存在が考えられる。地域住民を世代を超えて主導していくリーダーの存在は「子どもへの関心」を高める重要な要因になっているのではないだろうか。一方、地域独自の「新しい工夫」については今回の調査では残念ながら聞き取ることはできなかった。

ただ、4地域とも次世代の地域リーダーの不在と同世代間（現役子育て世代）の関係の希薄さを危惧されており、このあたりの状況を考えると何らかの「新しい工夫」が今後の課題になることは間違いないと考える。

今後の研究課題は、まず方法論上の問題として、今回は子どもへの関心の強い地域を選定したが、その対極の状況である、子どもへの関心の低い地域を選定した調査の実施である。今回の調査で関心の強い地域の共通項が少なからず明らかになったが、同じように、関心の低い地域の共通項を明らかにすることも必要である。加えて、都市部に限定した調査も必要と考える。今回の調査対象ははからずも地方の伝統的な地域共同体が残る地域になってし

---

8) この場合の都市化とは、農地が減り宅地が増加し、外部からの新しい居住者が増えたり、主要幹線沿いの商業施設・コンビニの充実、24時間化等の意味で用いる。

まったが、全国的には大都市圏においても、きわめて子どもへの関心の高い地域が含まれている。地域共同体的な繋がりの薄い地域で、どのような要因が子どもへの関心を高めているかは興味を持たれるところである。とりわけ、今回の調査では明らかにならなかった「新しい工夫」の内容が抽出できると考える。

## 参考文献

地域社会学編『キーワード地域社会学』ハーベスト社、2000年。

橋本和幸『地域社会に住む』世界思想社、1995年。

教育社会学学会編『新日本教育社会学事典』東洋館出版、1986年。

倉沢進編『地域社会を生きる』現代エスプリ328号、至文堂、1994年。

山下俊郎著『家庭教育』光生館、1983年。

